

令和4年度光市総合教育会議 会議録

1 開催日時

令和5年2月2日（木）午後1時30分～午後2時40分

2 開催場所

光市教育委員会1階ホール

3 出席者

(1) 構成員

光市長 市川 熙

光市教育委員会 教育長 伊藤 幸子

〃 教育委員 寺崎 益朗

〃 教育委員 平岡 いづみ

〃 教育委員 武田 伸治

〃 教育委員 岩佐 光恵

(2) 説明員

学校教育課指導主事 中野 未千尋

教育支援センター所長 水品 英之

(3) 関係者

升教育部長、吉永教育総務課長、原田学校教育課長、門岡学校教育課主幹、国広文化・社会教育課長兼人権教育課長、三好体育課長、眞嶋図書館長、高橋学校給食センター所長、秋友教育総務課経理係長、奥屋教育開発研究所主任研究員、永光教育企画員（学校教育課）、佐々木教育企画員（学校教育課）

4 傍聴者

4名

5 次第

開 会

(1) 市長あいさつ

(2) 議 事

一人ひとりを大切にしたい学びの保障について ～不登校の児童生徒への支援を中心に～

閉 会

6 議事録（要旨）

開 会

（1）市長あいさつ

それでは、会議の開催に当たりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

皆様方におかれましては、平素から本市教育行政の推進にご尽力を賜り、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、本日はお寒いなか、光市総合教育会議にご出席を頂きありがとうございます。

本会議では、本市の教育の在り方や進むべき方向性について、これまでも教育委員の皆様とともに、様々な視点から協議を重ねてまいりました。

この度は、一人ひとりを大切にしたい学びの保障について、特に、不登校の子どもたちに対する支援を中心に、皆様とともに議論を深めてまいりたいと考えています。

さて、子どもの数が減少する昨今、文部科学省のデータによりますと、全国の小中学校における不登校児童生徒数は、9年連続で増加しており、10年前と比較すると小学生は3.6倍、中学生は1.7倍増となるなど、もはや不登校傾向であることや学校生活に不適應な状態となることは、どの児童生徒にも起こりうる問題と言っても過言ではありません。

不登校あるいは不登校の傾向にある子どもには、一人ひとりにそれぞれ背景や人間模様があります。

こうした中で、私は、子どもたちの様々な「つながり」、より具体的に言うと「サポート」、例えば、友達とのつながりやサポート、家族とのつながりやサポート、学校とのつながりやサポート、地域とのつながりやサポート、こうしたことをいかに実現していくのが大きな課題だと思っています。

また、学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、子どもたちが自ら考え、行動していく能力を伸ばすこと、すなわち、「将来の社会的自立を目指す」ことに重点を置いた取組を充実させていくことが必要なのだと私は考えています。

現在、将棋の世界では、王将戦が開催されていますが、羽生善治九段は、「欠点の多くは長所の裏返し、それを無理に調整すれば、自分のかたちに何か狂いが生じ、調子が落ち込んでしまう。負けが込んでも、その時は足りない部分が明らかにされているときと考え、自分にしかない方位磁石をしっかりと磨くほうが大事である。」と仰っています。

今、何が大事なのかということ、私たち自身が考えなければならない、不登校の子どもたちが一人でも減ることを目指し、皆さんと共に考えていきたいと思えます。

最後になりますが、委員の皆様には、これからご紹介する本市の様々な取組の推進に向けて、どうぞ忌憚のないご意見、ご提言をいただきますよう、お願いいたします。

そして、本日の会議が、これからの教育や支援の発展に向けて実りあるものとなりますよう祈念申し上げまして、開会のご挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

(2) 議 事

一人ひとりを大切にした学びの保障について

～不登校の児童生徒への支援を中心に～

内 容：資料、パワーポイントを用いて、中野学校教育課指導主事及び教育支援センター水品所長より説明

【質疑、意見等】

(構成員)

登校するが、教室に入ることができない児童がいるということですが、これは不登校に入るのでしょうか。

(説明員)

学校に来ている場合は、出席扱いになるため、欠席日数にはカウントされませんが、年間で欠席が30日以上となった場合は不登校となります。

(構成員)

スクールライフ支援員を必要とした児童生徒数に関する資料によると、本市の不登校児童生徒数89名に対し、26名に支援を実施したということですが、残りの子どもたちはアウトリーチ型の支援もできていないということでしょうか。

(説明員)

89名に対し、あらゆる支援を模索していますが、実際に支援に結びついたのが26名となります。

(構成員)

全国の小・中学校における不登校の状況に関する資料には、児童生徒の状況が記されていますが、光市でも不登校の要因等を把握しているのでしょうか。

(説明員)

不登校の要因は、本市でも現状を分析しており、全国と同じような状況を示しています。

(構成員)

不登校の兆候が見られる際、まず学校の先生が気付いて対応されると思いますが、説明に

あったような様々な支援が充実してきたことで、先生方の負担は変化していますか。

(説明員)

家庭訪問の増加等により、一部負担が増えているとも言えますが、困難な事例については、教育委員会も連携して早急に対応している状況です。

(構成員)

不登校児童生徒の数は、確かに増加していますが、以前は生徒指導上の問題行動に対する指導が大きな負担となっていた時期もありました。

現在は比較的落ち着いているため、そちらに対する教員の負担は減少傾向にあると考えています。

(構成員)

まなびばひかりの開設や、各学校に相談室の設置など、教室と学校以外での児童生徒の居場所づくりに取り組んでいます。このようなステップを踏むことができる居場所を作るとは素晴らしいと思います。

その中で、実際にまなびばひかりを見学した際に、狭い部屋で壁に向かって授業をするような状況でした。一人ひとりの空間の確保についても、簡素なパーテーションを使用している状況であり、今後は設備の充実が必要になると思います。

第2次光市教育振興基本計画の施策の柱4に、「社会の変化を見据えた教育環境の整備・充実」とありますが、不登校児童生徒の教育環境の整備・充実に関する記載はありません。

まなびばひかりをはじめとした施設について、設備の充実が必要であると考えます。

また、学校の相談室に先生方が常駐することで、生徒は安心し、先生は常に生徒の状況を確認できる環境にあります。こういった体制により、段階的に生徒の居場所を作っていくことが重要だと思いました。

(構成員)

子どもたちにとって、学びの環境は非常に重要です。

我々も、直ちに使用可能な施設を利用して、一定の学びができる環境を整備しましたが、今後、子どもたちにとってさらに学びやすい環境になるよう、整備・充実に検討していかなければなりません。

一方で、子どもの特性によっては、壁に向かって学習する方がやりやすい場合もあります。児童生徒一人ひとりの特性を見極め、特性に合ったかたちで支援を実施していきたいと考えています。

(構成員)

子どもたちの特性に合わせた支援を実施していく上で、最終的に教室に戻ることを想定した場合、個室やある程度の広さのある空間など、特性に合わせた場所で支援することで滑らかに進んでいくのではないかと思います。

(構成員)

不登校児童生徒数が増えている状況は認識していましたが、不登校の理由の1位が無気力、不安ということは今回初めて知りました。

先程、説明の中で不登校の理由を把握されているということでしたが、光市では子どもたちはどのような状況にあるのでしょうか。

また、子どもたちに対する支援は、まなびばひかりなど様々な取組がありますが、保護者に対する支援はどのようなものがあるのでしょうか。

先程、支援を受けていた子どもたちからの手紙ということで、クラスの中でプレッシャーや圧迫感を感じたという言葉があり、そのことが不登校に繋がる子どもたちがいることがわかりました。その一方で、あそびばひかりに対しては、「大切な場所」という言葉もあり、家や学校とは異なる場所で、様々な人たちと会話や関わりを持つことで、次のステップに進むことができる場合もあるのだと思いました。

そういった場所を整備し、生きていく力を身に付ける様々な場所を提供してあげることが必要なのだと感じました。

(説明員)

本市の状況としては、例えば長期休業明けに生活リズムを崩し、欠席が何日か続くことで教室に入りづらくなったなど、不登校の理由を特定することが難しいケースが多くあります。

そのため、不登校の理由として、無気力、不安が増えていると感じます。中には、集団への適応が困難なケースや、友達とのトラブルがきっかけとなるケースも把握しています。

保護者に対する支援としては、例えば、月に1度開催しているあそびばひかりにおいて、保護者も出席し、同じ悩みを抱える保護者同士で意見交換や、スクールソーシャルワーカーによる相談なども実施しています。

また、学校においては、常にスクールカウンセラーから呼びかけ、気になる家庭に対しては、担任から保護者にお声がけなどによりケアしている状況です。

(構成員)

不登校の児童生徒に対する支援に向けて、先生、学校、保護者、家庭、光市教育委員会などが組織的に対応していくという図が示されていますが、光市では支援を必要とする子どもたちに対して、様々な方たちが一生懸命取り組んでおられると感じています。

いじめや不登校の要因となる事象に対しては、保護者の意見にしっかりと耳を傾け、担任など一部の教師だけではなく、校長をはじめとした学校全体、あるいは光市教育委員会で情報を共有することが必要だと考えますが、情報共有についてはどのように対応していますか。

(説明員)

基本的に週に1度程度、学校内で情報共有の場を設けています。何かトラブルが発生した際には、その場で、管理職の先生を含めて状況を把握し、今後の対応を検討していくこととしています。

(構成員)

国からの通知の中に、不登校の時期が積極的な意味をもつ一方で、学業の遅れなど将来的な自立のリスクになり得るといった記載がありました。光市でも、あそびばひかりに加えて、まなびばひかりという支援も始まり、学習支援の面も意識してのことだと考えていますが、子どもたちの成長には個人差があり、一人ひとりの成長スピードに合わせた支援が必要だと思います。

最後に、個別の支援の中で、子どもたちが自己肯定感を育むことができたような魔法の言葉があれば教えていただきたいと思います。

(説明員)

実際の支援の中で心がけていることは、まずは一緒に遊ぶ、気持ちを汲み取るということ、また、常に「大丈夫だよ。」「一緒にやろうね。」「僕は君の味方だよ。」と言った肯定的な言葉をかけることで、子どもたちは笑顔を見せ、子どもだけではなく、自分自身も前向きな気持ちになり、共に進んでいこうという気持ちを共有することができます。

(構成員)

最も大切なのは、子どもたちのあるがままを受け止めることだと思っています。

よく山登りに例えられますが、山頂への道のりは1つだけではなく、複数存在していますが、大人は自身が利用した1つのルートしか存在しないと思ってしまいます。違うルートで山に登る子どもたちを認め、それを支援し、共に歩む、共に走ることが必要なのだと思います。

まなびばひかりで、個に応じた支援計画を作成するのは、そういった視点からの取組です。子どもたちがどのようなルートを選んで山頂を目指しているのか、それを見極めながら応援することが重要なのだと考えます。

分身ロボットOriHimeの開発者、吉藤オリィ氏は、小学5年から中学3年まで不登校であり、その当時は、何のために生きているのかわからない状況でしたが、ものづくりの

専門家の先生との出会いをきっかけに、自分ができることを見出し、生きる意味を見つけることができたというお話をお聞きしました。

どんな子どもにも可能性があり、その可能性を見出し、引き上げるためのきっかけ、それが人や物事との出会いであると考えます。

本市が進めるコミュニティ・スクールの取組の中で、教員だけでなくいろいろな方たちと触れ合い、関わるができる環境が子どもたちにとって大事なのだと思います。

また、中一ギャップに対する取組としても小中一貫教育は進めていかなければならないと感じました。

(構成員)

熱心な議論をいただき、ありがとうございました。

委員の皆様からは、環境整備、保護者へのサポート、情報共有、支援の更なる進化など様々な意見をいただきました。

先程の子どもたちからの手紙の中で、いくつかキーワードがありました。

1つ目の手紙では、プレッシャー、圧迫感、アサギマダラ、先生、まなびば、2つ目の手紙では、授業の合間、先生、あそびば、挑戦、こういった言葉がキーワードとしてありましたが、これらを取り上げることで見えてくることもあるのではないのでしょうか。

本市の不登校児童生徒 89 名のうち、私たちが接触できたのは 26 名です。接触できていない子どもたちについては、一人でも多くの子どもたちが様々な人たちと繋がること、これが非常に重要だと考えます。

今後とも、皆さまから様々なご意見をいただきながら、子どもたち一人ひとりの特性に合わせた支援に取り組んでいきたいと思えます。

本日は本当にありがとうございました。

午後 2 時 4 0 分終了